



陶淵明
文心雕龍

義知海一
宏膳興 訳

世界古典文学全集

筑摩書房

陶淵明 文心雕龍

世界古典文学全集 第25卷

昭和 43 年 12 月 20 日第 1 刷発行

昭和 45 年 3 月 20 日第 2 刷発行

訳 者 一 海 知 義
興 膳 宏

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会 社

東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京(291) 7651(代表)
替 東京 4 1 2 3 番
振 郵便 号 1 0 1 - 9 1
郵

(分類) 0398 (製品) 20325 (出版社) 4604

目次

陶淵明

一海知義訳

陶淵明集 卷一 四言詩

雨雲のうた（停雲並びに序）

時の流れ（時運並びに序）

花咲く木（榮木並びに序）

長沙公におくる（長沙公に贈る並びに序）

柴桑の県知事丁君へ返すうた（丁柴桑に酬ゆ）

参謀の龐君に答える（龐参軍に答う並びに序）

農耕のすすめ（農を勧む）

子に名づけるうた（子に命ず）

帰りゆく鳥（帰鳥）

陶淵明集 卷二 五言詩

姿ト影ト魂ノ対話（形影神並びに序）

九月九日、わびずまい（九日閒居並びに序）

田園のすまいに帰る（園田の居に帰る五首）

38 37 33

30 25 21 18 16 14 11 9 7

斜川に遊ぶ（斜川に遊ぶ並びに序）

周・祖・謝三君に（周統之・祖企・謝景夷の三郎に示す）

乞食ノウタ（食を乞う）

周家の墓地へ行楽に（諸人と共に周家の墓の柏の下に遊ぶ）

龐・鄧両君に―怨みの詩の調べで（怨詩、楚調もて、

龐主簿・鄧治中に示す）

参謀の龐君に答える（龐参軍に答う並びに序）

五月一日、戴君に（五月旦の作、戴主簿に和す）

なが雨にひとり飲む（連雨独飲）

引越しのうた（居を移す二首）

柴桑県の知事劉君にこたえる（劉柴桑に和す）

柴桑県の知事劉君にかえず（劉柴桑に酬ゆ）

郭君にこたえる（郭主簿に和す二首）

王將軍の宴席で旅人を送る（王撫軍の坐に於て客を送る）

殷君との別れ（殷晋安と別る並びに序）

羊秘書官におくる（羊長史に贈る並びに序）

年の暮れに、張君にこたえる（歳暮、張常侍に和す）

胡君にこたえて、顧君に示す（胡西曹に和し顧賦曹に示す）

従弟仲徳の死を悲しむ（従弟仲徳を悲しむ）

陶淵明集 卷三 五言詩

鎮軍將軍の参謀として曲阿を通ったときの作（始めて鎮

軍参軍と作りて、曲阿を経しときに作る）

五月、都からの帰りに規林で風にはばまれたときの作

70

68 67 65 63 62 61 58 57 56 54 53 52 50 48 48 47 45 43

(庚子の歳、五月中、都より還るに、風に規林に阻まる二首)

七月、休暇をおえて江陵に帰るみち、夜、塗口を通る

(辛丑の歳、七月、赴任して江陵に還らんとし、夜、塗口を行く)

新春、田舎家で古人を偲ぶ(癸卯の歳、始春、田舎に懷古す二首)

従弟の敬遠に(癸卯の歳、十二月中の作、従弟敬遠に与う)

建威將軍の参謀として都に使し、銭溪を通ったときの作

(乙巳の歳、三月、建威参軍と為りて都に使し、銭溪を経たり)

旧居にかえる(旧居に還る)

火事にあう(戊申の歳、六月中、火に遇う)

九月九日(己酉の歳、九月九日)

西の田で早稲のとりいれ(庚戌の歳、九月中、西田に於て早稲を獲す)

下渚の田舎でのとりいれ(丙辰の歳、八月中、下渚の田舎に於て獲す)

酒を飲みつつ(飲酒二十首並びに序)

禁酒ノ歌(酒を止む)

子ヲ叱ル(子を責む)

ある悟りの詩(会ること有りて作る並びに序)

晦日の祭(蜡日)

71

古詩になぞらえて(擬古九首)

無題詩(雜詩十二首)

貧士の歌(貧士を詠す七首)

二人の疏の歌(二疏を詠す)

殉死の歌(三良を詠す)

刺客荆軻の歌(荆軻を詠す)

山海経を読む(山海経を読む十三首)

挽歌(挽歌の詩三首)

陶淵明集 卷五 辭賦 記伝 祭文

士の不遇に感ずる賦(士の不遇に感ずる賦並びに序)

情を閑める賦(閑情の賦並びに序)

婦去來の辭(婦去來の辭並びに序)

桃源のうた ならびに ものがたり (桃花源の詩並びに記)

晋の故の征西大將軍の幕僚長・孟府君の伝(晋の故の征西大將軍の長史孟府君の伝)

五柳先生ノ伝(五柳先生伝)

子の儼らに与える手紙(子の儼等に与うる疏)

程家に嫁した妹の靈に捧げる文(程氏の妹を祭る文)

従弟敬遠の靈に捧げる文(従弟敬遠を祭る文)

わが靈に捧げる文(自ら祭る文)

110 108 107 106 87 86

84

83 82 80 79

78 75

73

149 140 138 136 134 128 118 111

173 168 160 152

201 196 192 188 186 178

文心雕龍

與膳宏訳

第一章 原道（文学の原理）

第二章 徵聖（聖人の規範）

第三章 宗經（経書の祖述）

第四章 正緯（緯書の是正）

第五章 辨騷（楚辞の弁証）

第六章 明詩（詩の解明）

第七章 樂府（歌謡論）

第八章 詮賦（賦の詮索）

第九章 頌讚（頌と讚——はめうた）

第十章 祝盟（祝詞と盟約——祭儀の韻文）

第十一章 銘箴（銘と箴——教戒の韻文）

第十二章 誄碑（誄と碑——追悼の韻文）

第十三章 哀弔（哀辞と弔文——追悼の韻文二）

第十四章 雜文（雑多な様式の文学）

第十五章 諸議（諸議と隠語）

第十六章 史伝（歴史の文章）

第十七章 諸子（哲学の文章）

第十八章 論說（論と説——論文と演説の文章）

第十九章 詔策（みことのりの文章）

第二十章 檄移（檄文と移文の文章）

第二十一章 封禪（天地の神を祭る文章）

第二十二章 章表（章と表——上奏の文章一）

第二十三章 奏啓（奏と啓——上奏の文章二）

第二十四章 議対（論議と対策の文章）

第二十五章 書記（書簡の文章その他）

第二十六章 神思（想像力のはたらき）

第二十七章 体性（作家の個性と作風）

第二十八章 風骨（文章の生命力）

第二十九章 通变（伝統と変革）

第三十章 定勢（文章の調子）

第三十一章 情采（思想・感情と修辞）

第三十二章 鎔裁（構想の精練と表現の裁断）

第三十三章 声律（文章の音律）

第三十四章 章句（章と句）

第三十五章 麗辞（対偶表現）

第三十六章 比興（直喩と隠喩）

第三十七章 夸飾（誇張の効用）

第三十八章 事類（典故の運用）

第三十九章 練字（文字の選択）

第四十章 隱秀（含蓄と秀句）

第四十一章 指瑕（文章の欠陥）

第四十二章 養氣（活力の涵養）

第四十三章 附会（文章の有機組織）

第四十四章 總術（創作法の総括）

第四十五章 時序（時代と文学）

311 305 298 292 283 278 273 268 264 259 253 249 244 239 233 227 223 218 214 209

420 416 413 409 405 403 398 393 389 385 381 377 373 370 366 362 359 355 352 347 337 331 325 321 316

第四十六章 物色（自然と文学）

第四十七章 才略（作家の才能）

第四十八章 知音（文学の評価）

第四十九章 程器（作家の人間性）

第五十章 序志（文心雕龍縁起）

解説 陶淵明

文心雕龍

一海知義
興膳宏

470 457

452 447 442 434 430

文心雕龍・歴代主要作家略伝

略年譜

文心雕龍索引

陶

淵

明

陶淵明集 卷一 四言詩

雨雲のうた

「雨雲」は、親しい友を思ふうた。樽にはかもしたてのどぶろくがたっぷり、煙には初咲きの花が咲きそろふ。この時を友とすごす願ひかなわず、ためいきに胸はつまる。

どんよりとたれこめた雨雲
うすぐらくふりしきる春雨
地の果てまで 黒一色
平らな道にも行きなやむ
静かに東の窓辺に身を寄せ
春のどぶろくの壺ひとりさすりつつ
したしい友ははるかなた
気もそぞろにじつとたたずむ

雨雲はどんよりとたれこめ
春雨はうすぐらくふりしきる
地の果てまで 黒一色
平らな土地は川となる
そうだ 酒があったと
東の窓辺にくつろいで飲む

胸の底にあの友がうかぶが
舟も車もそこへはゆけぬ

東の煙の樹

枝々もようやく花咲き

花々はみずみずしい美しさを競い

私の心をさしまねく

人がよく口にすることはに

「歳月は過ぎ去るのみ」と

何とかして 膝つきあわせ

かつての日々を語りあいたいもの

ひらひらと空かける鳥たち

わが庭の樹に憩わんと

つばさをすばめてしずかにとまり

かわいい声で鳴きかわす

ほかに友がおらぬわけではないが

君を思うときの何と多いことか

思い思うてかなわぬ

このくやしさをどうしようぞ

停雲并序

停雲、思親友也。

罇湛新醪、園列

初榮。願言不從、

歎息彌襟。

停雲並びに序

停雲は、親友を思ふなり。

罇に新醪を湛え、園に初榮

を列ぬ。願うて言従わず、

嘆息、襟に弥つ。

1 靄靄停雲

靄靄たる停雲

26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2

翺翺飛鳥 息我庭柯 說彼平生 安得促席 日月于征 人亦有言 以招余情 競用新好 枝條載榮 東園之樹 願言懷人 舟車靡從 閒飲東窗 有酒有酒 平陸成江 八表同昏 時雨濛濛 停雲靄靄 搔首延佇 良朋悠邁 春醪獨撫 靜寄東軒 平路伊阻 八表同昏 濛濛時雨

翺翺たる飛鳥 我が庭柯に息う 彼の平生を説くを 安んぞ得ん 席を促して 日月 于に征くと 人亦た言えるあり、 以て余が情を招く 競うに新好を用てし 枝條に載ち榮え 東園の樹 願うて言人を懷う 舟車もて從う靡し 閒に東窓に飲む 有酒あり 酒あり 平陸を成す 江を成す 八表に昏く 同に昏く 時雨 濛濛たり 停雲 靄靄たり 搔首を擽きて延佇す 良朋 悠邁たり 春醪 獨り撫す 靜かに東軒に寄り 平路に阻まる 八表に昏く 同に昏く 濛濛たる時雨

27 28 29 30 31 32

斂翮閒止 好聲相和 豈無他人 念子實多 願言不獲 抱恨如何

翺を斂めて閒止し 好聲相和す 豈に他人なからんや 子を念うこと実に多し 願うて言獲ず 恨みを抱きて如何せん

1 「停雲」雲の集る形容。雪のふりしける形容にも使う。謝惠連「雪賦」に「靄靄浮浮たり」。

2 「深濛」霧雨がふりしきつてうすぐらい形容。「時雨」季節の雨、ほどよいときに降る雨。「礼記」月令に「季の春の月、時雨將に降らんとす」。

3 「八表」世界のすみずみまで。「表」は「外」と同じ。四方と四隅を八方とい、その八方の更に外を八表という。

4 「平路」たいらかな路。「楚辭」遠遊に見えることは。「伊」助字。嘆息の気持ちをふくむ。「阻」ゆくてをはばむ。通りにくい状況になるのをいう。

5 「東軒」軒は窓の手すり、あるいは窓。

6 「春醪」冬にしこみ春に醗酵したばかりのできたてのどぶろく。「劉柴桑に和す」(G.25)。「挽歌の詩」(G.105)にも見える。「撫」愛撫する。

7 「悠邁」はるかにへだたつたさま。あてどもなく遠く離れている形容。

8 「搔首」首はあたま。くびではない。気もそぞろな、または所在ない形容。

「停雲」空をおおってじつと動かぬ雲。たれこめた雲。この詩は次の「時運」「采木」と形式を同じくするところから、三部作をなしていると考えてよい。なお現存の四言詩は全部で九首。百数十首の詩作品の中で占める量は少いが、淵明文学の基本的な特徴は濃厚に示される。「樽」樽と同じ。「新醪」醪はどぶろく。できたてのどぶろく。「園」庭園、あるいは畑。「初榮」榮は花、初咲きの花。「願言」「詩経」に見える古い語法。嵇風・二子乗舟の詩に「願うて言は子を思ふ、心の中は獲養(不安定なさま)たり。「願」を毛伝は「毎なり」と訓じ、清の段玉裁は毎とは熱烈に思いつづけることだという。鄭箋は「念うなり」「言」は軽い助字、「われ」あるいは「ここに」とよみならわす。「從」行動や起居をとにもすること。「襟」えり、転じて胸の意。「弥」弥漫の弥、いっぱいになる。

『詩経』鄒風・静女の詩に「愛すれども見えす、首を掻きて踰躍る」。(延佇) 長い間じっとたたずむ。

12 (平陸) 平らな陸地。平地。(成江) 河になつてしまふ。

13 (有酒有酒) こうしたくりかえしの手法は『詩経』の詩にしばしば見える。

14 (閑飲) くつろいで酒を飲む。

16 (舟車) 『中庸』第三十一章に「舟と車の至る所」という表現があり、およそありとあらゆる地域の意に用いられている。その舟車をもつてしてもゆきつけない障害が、親友との間に生じた。その原因は雨である。しかし元の劉履『選詩補註』巻五もいうように、雨は何かの象徴としてうたわれているのであらう。

18 (枝条) 条は小枝。(載) 乃に似た強調の助字。やっつと、今こそ。ふつうのテキストは「再」に作る。(榮) 花が咲く。

19 (新好) 新しいすばらしさ。花についていうが、何かの寓意を含むかも知れない。

21 (人亦有言) 人は世間一般の人。この句法も『詩経』大雅の詩にしばしば見える。「こうしたことは(あるいは諺)もある」という意味。

22 (日月) 月日、歳月。(于征) 于は「ここ」とよみならわしているが、リズムをととのえるための軽い助字、『詩経』に見える古い語法。

23 (安得) 実現しがたいことを希望することば。(促席) 席はしきもの。話に興がのつて相手の方へにじりよること。西晋の左思の「蜀都の賦」に「樽を合し席を促し、満を引きて相い発す」。

24 (平生) かつての日々。あるいは若い頃。(論語) 憲問篇に「久要(古い約束)には平生の言を忘れず」。

25 (翻翻) 羽をひるがえして飛ぶさま。

26 (庭柯) 庭の樹の枝。

27 (翻) つばさの軸にあたる部分をいう。(閑止) 静かにとまる。「閑」は他のものにわすれられず静かにの意。「止酒」の詩(二〇)にも「逍遙して自ら閑止す」。

29 (他人) きみ以外の人の意。「豈無他人」の句も『詩経』鄭風・褰裳、唐風・杕杜、同じく羔裘の詩などに見える。

30 (子) きみ。親友をさす。(実多) 『詩経』秦風・晨風の詩に「如何ぞ如何ぞ、我を忘るること実に多し」。

31 (不獲) 獲は得と同じ。不可能の意。嵇康の「贈秀才入軍詩」に「願うて言獲ず、恨みて其れ悲しむ」。

32 (恨) 残念な気持。

時の流れ

「時の流れ」は、春の暮れそぞろ歩きのうち。春着もできあがり、風物はなごむ。影はうしろと二人づれ、そぞろ歩きに出かければ、よろこびと感慨と、こもこも心をひたす。

ぐんぐんと過ぎゆく時の流れ
おだやかに晴れあがった朝
仕立てあがりの春着をはおり
東の野辺に出かけてみる
山山はもやに洗われ
大空はうす雲にかげろ
吹く風は南から
新しい苗をはぐくむ

ひろびろと波おだやかな渡し場
口すぎまた手足をひたす
あてどなくひろがる眺め
心みたされまた眺めやる
人がよく口にすることばに
「気に入ればそれで満足」
独酌のこの盃に
陶然とひとり楽しむ

川の流に目をやれば
想うのは昔の澄んだ
若者たち 孔先生の下に学びあひ
のびやかに詩を吟じつつ帰る姿
私はこの静けさが好き

ねてもさめても酒をくんでいたい
ただくやしいことに時世がちがう
あてどないむかしのことよ

朝も夕も

憩うのはこのわが庵

草花と薬草 畦かえて植え

林と竹やぶ こんもりとほのぐらし

寢床には琴を横たえ

徳利にはどぶろく半ば

聖の御世は遠いむかし

感慨にただひとりふける

時運并序

時運、游春也。

春服既成、景物

斯和。偶景獨游、

欣慨交心。

時運並に序
時運は、暮春に遊ぶなり。
春服既成、景物に成り、
れ和す。景を偶いて独り
び、欣慨、心に交わる。

邁邁時運

穆穆良朝

襲我春服

薄言東郊

邁邁たる時運、
穆穆たる良朝、
我が春服を襲ね
薄く言に東郊にす

5 山濂餘靄
6 宇暖微霄
7 有風自南
8 翼彼新苗

山濂に餘靄われ
宇に暖微たり
風あり南よりし
彼の新苗を翼く

9 洋洋平津

10 乃漱乃濯

11 邈邈遐景

12 載欣載矚

13 人亦有言

14 稱心易足

15 揮茲一觴

16 陶然自樂

洋洋たる平津
乃ち漱ぎ乃ち濯う
邈邈たる遐景
載ち欣び載ち矚る
人亦た言えるあり
心に稱えば足り易しと
茲の一觴を揮い
陶然として自ら樂しむ

17 延目中流

18 悠想清沂

19 童冠齊業

20 閒詠以歸

21 我愛其靜

22 寤寐交揮

23 但恨殊世

24 邈不可追

目を中流に延べ
悠かに清沂を想う
童冠に業を齊しくし
閒かに詠じて以て帰る
我其の静を愛し
寤寐に交ごも揮わん
但だ恨むらくは世を殊にし
邈として追う可からざるを

25 斯晨斯夕

26 言息其廬

27 花藥分列

28 林竹翳如

29 清琴橫牀

斯れ晨に斯れ夕
言に其の廬に息う
花藥に分れ列び
林竹に翳たり
清琴に横たえ

30 濁酒半壺
31 黃唐莫逮
32 慨獨在余

濁酒^{どくしゅ}半^{はん}壺^ぼなり
黃唐^{わうたう}莫^な逮^{たひ}
慨^{がい}獨^{どく}余^よに在^あり

〔時運〕時の流れ、時間の運行。「九日閑居」の詩(9.38)にも「空しく時運の傾くを視る」。「春服」春着、合服。「論語」先進篇に、孔子が弟子たちに抱負や理想をたずねたとき、曾皙の答として「暮春には、春服既に成り、冠者(若者)五六人、童子六七人、沂(の川)に浴し、舞雩(の台)に風み、詠じて帰らん」という。「景物」目にふれる自然の風景。「斯和」斯は助字。和は調和すること。「偶景」景は影と同じ。偶はならぶこと、一對になること。影だけをともにつれて。「欣慰」喜びと感慨と。

1 〔邁邁〕どんどん過ぎ去ってゆく形容。

2 〔穆穆〕おだやかな形容。「良朝」天氣のよい朝。「帰去来の辞」にも「良辰を懷いて以て孤り行く」(p.171)。

3 〔襲〕上に羽織ること、一般に着物を着ることにいう。

4 〔薄言〕薄は無意味な発語の助字。いささか、しばらく等とよみならわしている。言も助字(前出、p.10)。「東郊」郊は郊外。

5 〔余黨〕たつぷりとあるもや。「滌」洗いおとす。

6 〔字〕そら。「微霄」うすくも。「腰」うすく日をかげらしているさま。

7 〔有風自南〕南風は作物を育てる風。「詩経」北風・凱風の詩参照。

8 〔翼〕つばさの中でひなを養うように、成長を助けること。

9 〔洋洋〕ひろびろと水のひろがるさま。「平津」津は渡し場。平は波のおだやかなこと。

10 〔乃く乃く〕あとの載く載くと同じく、……し、また……する。ともに『詩経』に見える古い語法。小雅斯十の詩に「乃ち寝乃ち興き云云」。「漱」口をすすぐ。「濯」手足を洗う。

11 〔遼遼〕はるかにへだたった形容。「遼景」遠景。

12 〔矚〕眺める。

13 〔人亦有言〕『詩経』大雅に見える語法(前出、p.30)。

14 〔稱心易足〕氣に入れば簡単に満足する。

15 〔一觴〕觴はさかずき。「揮」杯のしずくをきることか、『礼記』曲礼上に「玉

爵を飲む者は揮わず」。古注に「余酒を振り去るを揮という」。「雜詩」第二首9.11(6)にも「杯を揮いて孤影に紡む」という。後出の揮も同じ意か。

16 〔陶然〕氣持よく酔うさま。うっとり。

17 〔中流〕川のまん中。

18 〔悠〕はるかにへだたったさま。「清沂」澄んだ沂の川の流れ。沂はさきの「論語」に見える魯の国の川。以下の二句とともに「論語」を想起したもの。

19 〔童冠〕冠は元服をすませ冠をつける年頃の若者。「齊業」業は授業。同じ先生の下で学ぶこと。

20 〔閒詠〕他にわずらわされることなく詩を吟ずる。

22 〔閒寢〕寢は目さめる。寐は寝る。ねてもさめても、四六時中。「詩経」周南・關雎の詩に「窈窕たる淑女は、寤寐にこれを求む」。「交」かわるがわる。

23 〔殊世〕異った時代に生きる。

24 〔追〕追求する、あるいは追体験する。

26 〔廬〕庵。

27 〔花葉〕草花と葉草。「分列」別別に植えてあること。

28 〔林竹〕林と竹やぶ。「翳如」ほのぐらしいさま。

29 〔清琴〕清潔な琴。次の濁酒と対にするための美称。「牀」ベッド。

31 〔黃唐〕古代の帝王である黃帝と陶唐氏堯帝。「莫逮」手がとどかない。

32 〔慨〕感慨。

花咲く木

「花咲く木」は、老いの近づくのを思ううた。月日は移りゆき、またもや夏。あけまきの童のころから道を学んで来たが、しらが頭になってもものにならぬ。

こんもりと咲きはこる木々

根をこの土地に結び
朝に照りかがやくその花も

夕にははや色あせる。
人生はまるで仮りずまい
いつかはみなやつれゆく
そのことを静かに思い思えば
悲しみに胸ふさがれる

こんもりと咲きはこる木々
この土地に根を寄せて
咲きに咲く花 朝に開くも
いたましや 暮にはなし

固さもろさは人により異なるが
災と幸はいつ訪れるかわからぬ
道のはかに頼りにすべきものはなく
善のはかに踏み行うべきことはない

ああ 私というつまらぬ男の
このかたくなさは生まれつき
ゆく年は流れすぎゆき
学業はむかしのまま

寸陰を惜しむ境地を目ざしたものの
日々酔いしれてぜいたくな気分ひたつて来た
私のこののんきぶりには
我ながらやましさに心がいたむ

先師孔子のこされた教えを
私も忘れたわけではない
「四十になっても名を成さぬものは
まこと恐れるに足らぬ人物」と

わがよき車にあふらさし
わが名馬にむち打とう
千里といえはるかな道のり
だが行きつけぬことはあるまい

榮木并序

榮木、念將老也。
日月推遷、已復
九夏。總角聞道、
白首無成。

1 采采榮木
2 結根于茲
3 晨耀其華
4 夕已喪之
5 人生若寄
6 顛頓有時
7 靜言孔念
8 中心悵而

9 采采榮木
10 于茲托根
11 繁華朝起
12 慨暮不存
13 貞脆由人
14 禍福無門
15 匪道曷依
16 匪善奚敦

榮木並びに序
榮木は、將に老いんとする
を念うなり。日月、推遷し
日に復た九夏。總角より道
を開き、白首、成るなし。

采采たる榮木
根を茲に結ぶ
晨に其の華を耀かすも
夕には已にこれを喪う
人生に若く寄するが若く
顛頓の時あり
靜かに言れ孔だ念い
中心に悵而たり

采采たる榮木
茲に于いて根を托す
繁華朝に起るも
暮に存ぜざるを慨く
貞脆に人により
禍福無門なし
道に匪ずんば曷ぞ依らん
善に匪ずんば奚ぞ敦うせん

17 嗟予小子
18 稟茲固陋
19 徂年既流
20 業不增舊
21 志彼不舍
22 安此日富
23 我之懷矣
24 恒焉內疚

25 先師遺訓
26 余豈云墜
27 四十無聞
28 斯不足畏
29 脂我名車
30 策我名驥
31 千里雖遙
32 孰敢不至

嗟予小子 嗟の予の小子
稟茲固陋 稟の茲の固陋
徂年既流 徂の年既に流れ
業不増舊 業の旧に増さず
志彼不舍 彼の舍かざるに志し
安此日富 此の日に富むに安んず
我之懷矣 我の懷んずるや
恒焉として内に疚し

先師遺訓あり 先師の遺訓あり
余豈に云に墜わんや 余豈に云に墜わんや
四十にして聞ゆるなきは 四十にして聞ゆるなきは
斯れ畏るに足らず 斯れ畏るに足らず
我が名車に脂さし 我が名車に脂さし
我が名驥に策たん 我が名驥に策たん
千里遙かなりと雖も 千里遙かなりと雖も
孰か敢て至らざらんや 孰か敢て至らざらんや

〔榮木〕花の咲いた木。あるいは生い繁った木。〔飲酒〕第四首（p. 91）に「勸き風に榮木なし」。（念）深く思う。〔推遷〕推移と同じ、うつりかわること。〔九夏〕夏九十日（三か月）のこと。九を各テキストは有に作る。いま陶淵本に従う。〔總角〕子供。子供の髪のかき方。左右にわけて輪をつくり角状にした髪形。あけまき。〔聞道〕真理について学ぶ。道は人間の歩むべき正しい道。〔論語〕里仁篇に「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」。（白首）しらがあたま。老人。（無成）ものにならぬ。何も成就できなかった。〔楚辭〕九弁の「蹇に淹留して成るなし」というのにもつき、〔飲酒〕第十六首（p. 106）にも「淹留して遂に成るなし」という。

〔采采〕さかんに繁るさま。擬態語。〔詩経〕秦風・采芣の詩に「采芣采芣た

り。毛伝は「萋萋・蒼蒼の同義語として『盛なり』という。同じ『詩経』召南・卷耳の「萋耳を采り采る」、芣苢の「芣苢を采り采る」の毛伝にもつき花をつむ意とする説もあるが、採らない。

5（人生若寄）寄はかりずまい。魏の文帝の樂府「善哉行」にも「人生如寄」とい、〔文選〕李善注は「尸子」を引いて「老萊子曰く、人生は天地の間の寄

なり、寄する者は固より帰るなり」という。また「古詩十九首」にも「人生忽として寄の如し、寿は金石の固きなし」の句がある。

6（顛倒）憔悴と同じ、やつれること。（有時）きまった時期がある。

7（靜言）言は助字（前出）。〔詩経〕邶風・柏舟、また衛風・淇の詩に「靜かに言これるを思ふ。毛伝に「静は安なり」。（孔）甚と同じ。

8（中心）心中と同じ。〔詩経〕邶風・終風の詩に「中心是れ悼む」（惓惓）而是然と同じ。惓惓はものがなしいさま。

12（慨）慨嘆する。

13（貞脆）貞はかたくて変化せぬこと、脆はもろくて変化しやすいこと。

14（禍福無門）不幸や幸福が訪れて来るのに、きまった入口はない、どこから訪れるかわからぬ。〔春秋左氏伝〕襄公二十三年の条に「禍福に門なく、唯だ人の召く所」。

15（匪）非と同じ。（曷・奚）ともに何と同じ。

16（敦）心から尊重し、実践する。〔礼記〕曲礼篇に「善行を敦くして怠らず」。

17（小子）ちっばけなつつまぬ男。つぎの「先師」に対していう。〔詩経〕周頌に「閔むべし小子」。

18（固陋）かたくなな性格。（稟）天からさずかる。性質としてもつ。

19（徂年）すぎゆく年。

20（業）学業、学問。

21（不舍）寸陰を惜しんでばげむこと。〔論語〕子罕篇の「子、川の上にて在りて曰く、逝くものは斯くの如き夫、昼夜を舍かず」というのにもつき、

「不舍」の二字で、時間を惜しんで努力する意に用いたもの。

22（日富）〔詩経〕小雅・小宛の詩の「彼の昏くして知らざる、壹に酔うて日に富む」にもつき、酒に酔って金持ちになったような気分になることをいう。

23（我之懷矣）これも『詩経』邶風・雄雉の句。鄭箋に「懷は安んずるなり」と

いう。

24 「恒焉」心のいたむさま。「詩經」檜風・匪風の詩に「中心恒たり」。毛伝に「恒は傷むなり。焉は然と同じ接尾語。」「内疚」「論語」顔淵篇に「君子の条件をきかれた孔子の答として「内に省みて疚しからずんば、何をか憂え何をか懼れん。」「爾雅」釈詁篇に「疚は病むなり」。心の苦しみをいう。

25 「先師」孔子をさす。「癸卯の歳、始春、田舎に懷古す」第二首（中）にも「先師遺訓あり、道を憂えて貧を憂えず」と。「遺訓」後世にのこした教え。次の「四十無聞、斯不足畏」をさす。

26 「云」語調をととのえる無意味な助字。「暨」失う。見失う。記憶の中からなくなることをいう。

27 「四十無聞」四十歳になっても名声があらぬ。「論語」子罕篇に孔子のことばとして、「四五十にして聞ゆるなきは、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ」。

29 「名車」りっぱな馬車の意か。

30 「名驥」驥は一日に千里をゆくといわれる名馬。

32 「孰」誰と同じ。「敢不」反語。

長沙公におくる

長沙公は、私にとっては親族である。ともに大司馬を祖先とするが、位牌の数を重ねて、もはや他人となつてしまつた。潯陽のまちを通られたとき、別れにあたってこの詩をおくつた。

同じ源から出たふたつの流れ
人はかわり世もへだたつて

なげかわし 目覚めのたびにためいきし
そのかみのことを思い思う

今は互いに喪服もつけぬ間柄となり
年月ははるかにすぎ去つたが

路傍の人も皆兄弟ということばを思い
なつかしさに離れがたい心がうずく

ああ 令名高いわが一族

実にその遺業を守り通されたあなた

なごやかな心は冬の日ざしのようにあたたかに

胸底には光をはなつ玉を藏して

春の花つむなごやかさのうちに

秋の霜へのかまえを見せる

私はいおう「御身をつつしまれよ

あなたは実に御本家のほまれ」と

いまここに私はめぐりあい

年をこえて同じ志をもつことを知つた

しばらく談笑したかと思うと

もう西と東に別れねばならぬ

遙かかなたの湘水のほとりと

ここ水流ゆたかな九江のまちと

山川をへだてて遠く

使者がかようなもまれ

何によつてわが心中をのべつくそうぞ

かの古人の名言をおくりものとしよう

「もつこで運ぶ土はわずかであつても

ついに山をきざぎざ上げる」と

御身をつつしまたまえ 旅人よ

別れにのぞんで身がひきしまる

また胸襟を開くのは遠い先のことだろう

ともあれまず便りを寄せられよ